

# ドイツ語

## 第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

### 1 前 文

大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）(2)が実施されることは、大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の本試験が2回実施されることと同じである。ただ、「ドイツ語」の共通テスト(1)の受験者が「英語」のように試行調査を経験しておらず、共通テストを受験した時に初めて「ドイツ語」の出題形式を目にしたのに対し、共通テスト(2)の受験者は、共通テスト(1)の問題に目を通してから受験していることが予想される。共通テスト(1)の問題に目を通したことで時間配分や使用語彙数などの見当がつくため、共通テスト(2)の受験者の方が、落ち着いて試験に取り組めると思われる。このように、共通テスト(1)と共通テスト(2)の受験者の状況には違いがあると考えられることから、共通テスト(1)と(2)の比較もしながら、各出題について述べたい。

### 2 内 容・範 囲

第1問 発音やアクセント、動詞や複数形のつくり方など基本的な知識を問う出題。

問1 bの発音問う出題。④Bremseはなじみがないかもしれないが、①Obstは発音問題において特に頻出する語である。

問2 aウムラウトの長短を問う出題。正答①も基本的な語彙。

問3 共通する語頭のつづりを持つ2つの語のアクセントを問う出題。ein-の前つづりから始まる語のアクセントの位置は強調して教えている。

問4 不規則動詞の人称変化を問う基本的な出題。

問5 共通テスト(1)では動詞の過去基本形を問う出題だったが、共通テスト(2)では過去分詞が問われている。受験者には過去形よりも過去分詞の方がなじみがあるだろう。

問6 共通テスト(1)と同様、複数にしたときに母音に変音するかどうかを問う出題。例を提示する必要性が感じられない。教える側としては、母音の変化よりも語尾変化に注目して教えている。

問7 特定のテーマに属さない語を探す。①～③をA～Cに当てはめることは難しくない。

第2問 短文の中で文法知識を問う出題。

問1 besprechenの4格目的語を問う出題。

問2 erfüllenはやや難。

問3 不定関係代名詞③Werを選択する。物ではなく人についてだということが分かるか。

問4 前置詞の意味を問う出題。学校で勉強している場合は、授業で扱われることがあり、難しくはない。

問5 未来形。文末の動詞が、不定形であることから消去法で正答に至ることも可能。

問6 gelingenはsein支配の動詞であるが、最近教科書の説明や練習問題でも見かけなくなった。

問7 um<sup>4</sup> bittenの前置詞が問われている。覚えてほしい表現。

問8 「できる限り～」を表すmöglichstに形容詞の原級が後続することを知っているか。曖昧な知識では他の選択肢と間違えるかもしれない。

第3問 文法の知識を利用し、構文に合わせて選択肢を並べ替えることで文を完成させる。セン

ター試験でも取り入れられた出題形式であるが、共通テスト(1)と同様に、与えられた選択肢に不要なものが一つ含まれることで解きにくくなり、全体的に難度が高くなっている。

問1 um … zu不定詞句内の語順についての出題。

問2 従属接続詞daに続く副文内の語の並び替え。主文の動詞と、副文内の動詞の位置が問われている。

問3 関係詞を含む副文の並び替え。単語はそこまで難しくはないが、熟語的表現のetwas mit<sup>3</sup> zu tun habenの語順を問われるのは厳しい。

問4 疑問代名詞wasを用いた副文の語順と、主文内の前置詞の選択。

問5 接続法Ⅱ式の主文、副文の並び替え。共通テスト(1)においても第3問の間3に接続法Ⅱ式の出題があった。共通テスト(1)では接続法過去が問われていたのに対し、共通テスト(2)では接続法現在となっている。

第4問 一連の比較的長い対話を読み、設問に答える。使用語数が多く、読み解くのに時間を要する。共通テスト(1)とは違い、2部構成であり、Ken, Maki, Daniellによる旅行前の話と、旅行中の会話である。状況説明もドイツ語で書かれている。前半部分はオンラインでの会話となっているが、オンラインでのやり取りはコロナ禍の学習を通じてイメージしやすくなったのではないか。

問1 ㉔の発言の意図を理解する出題。どのような意味合いでsollenが使われているのか、そして、langsamが速度を表していないことが分かるか。選択肢もそこまで難しくなく、良問。

問2 ㉕の表現自体は難しいが、その発話の前後の文から推測可能かもしれない。

問3 スマートフォンの画面の時刻表と選択肢の表現を結びつける。話の流れが分からなくても解答できる。

問4 話し手の気持ちをくみ取る出題。その後のDanielのセリフから気持ちを類推するのだろうが、発言した時の意図が、その後の話の流れに関係するとは限らない。また、発話した時の気持ちは前のやり取りから判断するものだろうが、㉙の発言まででは②には絞り切れない。その後のセリフから最も適切なものと言われれば②であるが、②以外が当てはまる可能性も否定しきれないのではないか。

問5 駅での放送を読み取る。ausfallen表現が難しいかもしれないが、後のやりとりから類推が可能か。ドイツの鉄道事情を知っているなら、より一層場面は想像しやすい。

問6 前半の旅行前の会話文からKenの「山城を見たい」という希望を確認し、選択肢を選ぶ必要がある。良問。

問7 適切な会話表現を選ぶ。

問8 旅行前と旅行中という2つの会話文やスマートフォンの画面から、電車の時刻、種類、ルートを読み取り総合的に判断する。思考力・判断力・表現力等を問う良問である。

第5問 会社の同僚である2名の女性による対話とメールの画面との組合せからの出題。2人の登場人物のうちの1人の恋愛事情に関する話となっており理解しやすいことに加え、身近なテーマであり場面を想像しやすいが、展開が急な印象。

問1 Yvonneの34のセリフ後の( )にある行為を表すzeigenから、何かを見せている様子が分かるか。

問2 an<sup>3</sup> zweifelnの言い換えを選ぶ。否定表現から肯定表現を選ぶ。

問3 schaffenが分からなくても、Dirkが映画に行けないことは分かる。正答に至るには、Ich muss jetzt ganz dringend ein paar Dinge erledigen.の文意が分かる必要があるがerledigenはやや難語。㉚の文に含まれているschaffenは、共通テスト(1)の第4問の間4の正答に含まれてお

り、共通テスト(1)の問題に目を通していたら、より解きやすくなるかもしれない。

問4 *einfallen*を含む表現はやや難しい。消去法から正答を判断するには、相当な時間をかけて、かなり細かくやり取りの内容を把握しなければならない。

問5 誰が何を発言したのかを整理し、選択肢に挙げられた感情を表す形容詞が分かれば判別可能である。

第6問 日本の高校に留学しているドイツ人が書いたブログ形式の文章からの出題。高校生活が題材であり、現在完了形が中心の文なので、受験者にとっては共通テスト(1)の物語よりはるかに取り組みやすい。

問1 ブログの流れと、実際に文章に出現する順番とが一致していないことに注意し、時系列に沿って並べる。共通テスト(1)と同じ形式の出題。

問2 Yuriからのメッセージ(サッカーの試合、英語の課題の手伝い)への返答を選ぶことはさほど難しくはない。

問3 Leonの一日について理解が進んでいけば、⑤を選ぶことは難しくはない。本文中の*Kunstist* … *mein Lieblingsfach*から美術が好きだということが読み取れるか。また、*drei Tore gehalten*がゴールを止めたことだと分かるか。

第7問 パーソナルスペースについての長文。本文の理解を助けるような図が挿入されている。本文中でも4種類のスペースが太字で強調されており、話題が切り替わっていることがただけで分かる。テーマ自体は共通テスト(1)より難しそうであるが、それぞれの独問独答の語彙数が抑えられており、配慮がなされている。

問1 問1の文にある*Kunden*と*Verkäufer*が、本文にある*Servicepersonal*の言い換えだと分かるか。

問2 3段落目の最初の文の内容理解ができるか。正答④は外国語学習には欠かせない考え方であり、他の選択肢も一般的な知識で消去可能かもしれない。

問3 一般的な知識と選択肢のドイツ語がある程度理解できれば、そこまで難しくはない。

問4 本文中の*Nordeuropa*(北欧)の国の1つである*Finnland*を指すことが分かるか。ヨーロッパの地理を理解している必要がある。

問5 *argentinischer Kollege*が*Kontaktkultur*である*latinamerikanische Länder*の例として、そして、*Nicht-Kontaktkultur*の例として*deutscher Politiker*が挙げられていることを読み取り、その対比が分かるか。加えて、本文に描かれている両政治家の行動についての描写が理解できるかがポイントになる。*heranrücken*は難語。

問6 選択肢の語句はやや難しいが、*verzichten*は共通テスト(1)の第5問の本文にも使われている。また、異文化に対する理解があれば、ある程度は判断可能か。

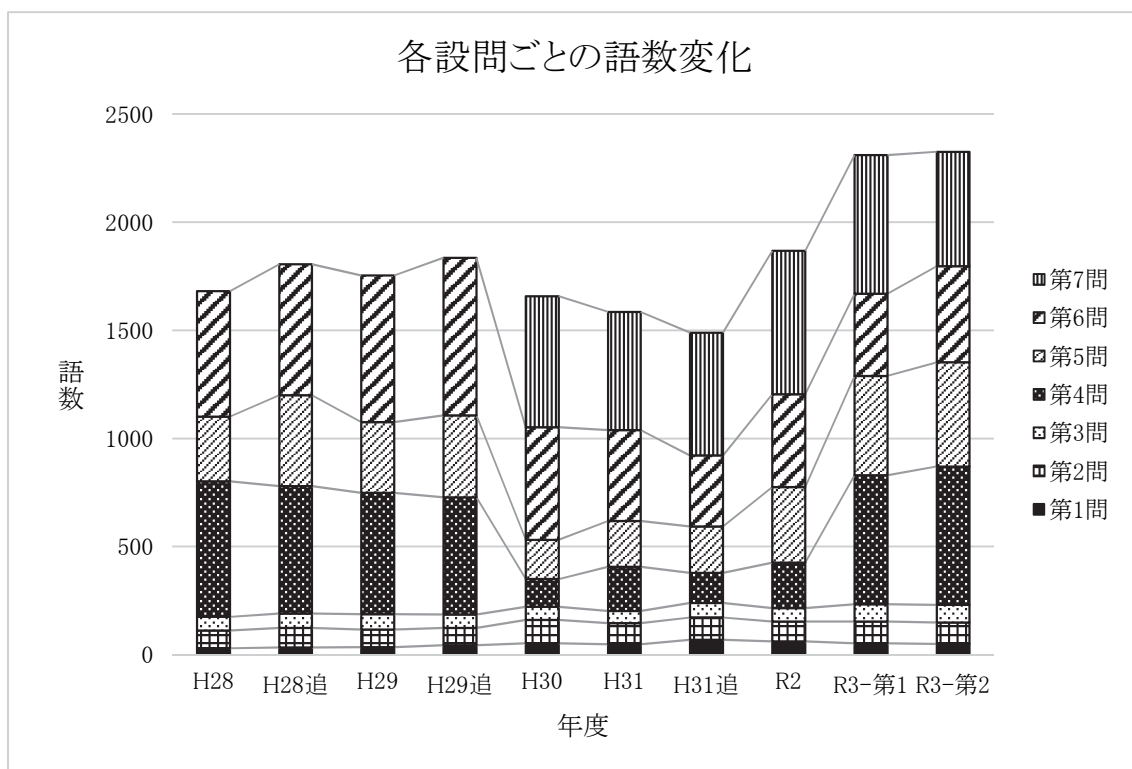
問7 図から判断する。本文の大意がつかめていけば難しくはない。また、問5と同じ方向性の出題であり、問5が理解できているのであればさほど難しくはない。また、問7が問5の理解を助けている。

### 3 分量・程度

語彙数がセンター試験の時と比較すると、前年比約1.2倍、一昨年比約1.5倍と増加しているが、設問数は1問しか増えていない。試験時間は80分と変化がない中で、1.2~1.5倍のドイツ語文を読みこなさねばならない。第3問では使われない選択肢が増え、迷う要素が増えたことも加わり、受験者にとっては負担になったかもしれない。センター試験と比較して増えた語句は独問独答に充てられ、本文だけでなく設問やその選択肢も読み込まなくてはならない。第4問で語彙数が格段に増

えている点は、共通テスト(1)も同じである。

共通テスト(2)の受験者は、共通テスト(1)の試験問題を目にすることができるため、出題傾向と形式を理解しており、時間配分についてもある程度試験実施前に計画を立てることができる。両日程の第4問以降の出題に大きく差はないように見えるが、テーマ設定など、受験者が状況を思い浮かべやすい出題が、共通テスト(2)の方が多い。第4問の会話形式の出題では、共通テスト(1)とは異なり2部形式となり、スマホの画面や地図などの図表があり、理解を助けている。また、第6問では、共通テスト(1)と異なり現在完了形が中心のブログ形式の文章からの出題となっており、共通テスト(2)の方が取り組みやすいと受験者は感じるのではないか。



#### 4 表現・形式

共通テスト(2)で受験をする場合、既に共通テスト(1)の試験問題を目にしている可能性が高く、共通テスト(1)の受験者よりも形式変更に伴って受けた衝撃は限定的だと考えられる。

両日程とも、幅広い文法・語彙の知識から、こなれた口語表現まで、センター試験の時よりも幅広い知識が求められている印象を受けた。特に、口語表現は、ALTとの授業経験、あるいは、ネイティブとの会話経験の有無に左右されることも多く、教科書を純粋に学習しているだけではカバーできない出題が多かった。特に第1回共通テストでは、両日程とも、教科書を純粋に学習しているだけではカバーできないような表現が出題されていたように感じられる。

第6問では、共通テスト(1)で過去形を多用する物語が出題されたのに対し、共通テスト(2)では現在完了形を主に用いたブログが出題されている。最近の教科書ではブログや私的な手紙文に接する機会が多く、物語や新聞記事のように過去形を用いた表現に触れる機会は多くない。このような学習環境で学んできた受験者にとっては、共通テスト(2)の問題の方が取り組みやすかったに違いない。

共通テストにおいて、「ドイツ語」にはリスニングの設定がなく、受験者のアクセントや母音の長短への意識を持たせるためにも、今回の共通テストのようにアクセントや母音についての出題が必要であると考えられる。

「思考力」「判断力」を問うことを共通テストでは意識しているのかもしれないが、記述式の出題がない中で、それらの能力を問うには限界があると感じている。共通テスト(2)では、第4問の間8のように、受験者に対し、本文や与えられた図表の情報等を整理し、必要な情報を抽出し、情報と選択肢との整合性を確認させるような良問も見られた。一方で、両日程とも、本文に書かれていないことに対し、想像力を働かせて発話の意図をくみ取り、与えられた選択肢の中から話者の考えとして最適な答えを選ぶ出題があったが、この出題方法が、はたして入試で問おうとしている「思考力」「判断力」なのかは大いに疑問が残った。

## 5 ま と め

第1回共通テストの形式が維持されるのか、そして設問数が大きく増減するのか、令和4年度以降の受験者や教える側にとっては気になるところであろう。英語のように、試験で扱われる・扱われない項目の目安が示されるだけでも、受験者は安心して受験勉強に集中することができるだろう。

英語とは違い「ドイツ語」の学習環境は多種多様であり一般化することができない中で、高校の現状を鑑みて両日程の「ドイツ語」の問題作成に多くの時間と労力を割いてくださっている問題作成委員の方々に感謝申し上げます。国語や地理歴史、公民の必修科目の増加に伴い、ドイツ語を含む第二外国語の授業時間の確保がより難しくなることが予想される。そのような厳しい環境の中で、英語以外の外国語に積極的に取り組み、意欲的に学習する生徒にとって、共通試験は学習の指針の一つとなるものである。生徒たちの頑張りを測ることができる共通テストのような枠組みが維持されることを切に願っている。

## 第2 教育研究団体の意見・評価

### ○ 日本独文学会 ドイツ語教育部会

(代表者 太田 達也 会員数 約550人)

TEL 03-5950-1147

#### 1 前 文

高等学校における外国語としての「ドイツ語」教育は、それぞれの高等学校が置かれている状況に応じて授業時間数やカリキュラムなどが決められており、現在ではドイツ語に特化した指導要領はない。本報告では、大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）のドイツ語の問題が、高等学校のドイツ語教育に求められ得るドイツ語の基礎学力を測り、大学教育を受けるにふさわしい能力を判断する設問になっているかを総合的に評価する。

共通テスト(2)は受験者が少なく、平均点等の情報は公開されていない。共通テスト(1)との難度の違いや過年度の問題との比較は単純にできないため、本報告では問題の質と量、使用された語彙の観点から意見・評価する。

#### 2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

今年度の共通テスト(2)「ドイツ語」は、問題数（全51問）、大問ごとの問題数ともに、共通テスト(1)の試験と同じである。第1問～第3問は、共通テスト(1)同様、基礎的な発音と文法を問う内容であり、全問題数の49%を占めている。第4問は、連続する2つの会話で構成されており、会話テキスト②の理解のためにはテキスト①も理解している必要がある。例えば、空欄31はテキスト②に下線が引かれているが、その答えはテキスト①の中にあるなど、両テキストの連続性を十分に意識し、さらに解答する時間配分にも注意が必要である。第5問の会話テキストは、第4問ほど長くないが、設問の選択肢が全てドイツ語であることが特徴である。第6問は、共通テスト(1)では童話であったが、共通テスト(2)ではドイツ人のブログという過年度にも見られたSNSを用いた形式となっている。第7問は科学的な読み物となっている。

ドイツ語総語数は2,178語で、スマートフォンに届いたメッセージ文も読ませるなどの場面もあるため、総語数は若干多い印象がある（共通テスト(1)は2,144語）。総語彙数は687語（同614語）で、ここ数年でもかなり多い部類に入ると思われるが、第4問や第7問で多数の地名が出ていたことも影響している。

この687語のうち、本評価で使用している過去の出題語彙データベースに蓄積している語、一般的な独和辞典（見出し語6～8万語程度）で基礎語彙として扱われている語、基礎語彙を組み合わせた合成語、固有名詞、国際語、注付きの語、派生語のうち形態素の意味からその意味が容易に想像できる語などを除くと、やや難度が高いと思われる語の数は26語であった(★)。なお、この26語は、一般的な独和辞典において、いずれも見出し語として掲げられている。

★ anfeuern, angemessen, arabisch, Argentinier, argentinisch, arrogant, auslösen, beispielsweise, Brasilien, brummen, buddhistisch, daraufhin, Desinteresse, Durchsage, einschätzen, einteilen, enorm, erneut, Geländer, Gestik, heranrücken, intensiv, intim, Karotte, Mimik, variieren

本評価書では、平成30年度より、ドイツのゲーテ・インスティトゥートがヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)に基づいて作成・公表しているドイツ語B1レベル語彙リストに含まれるかどうか調べている。これは、受験者が単語を学習するときの国際的な指針となるものである。上記26語のうち

4語 (beispielsweise, Durchsage, Karotte, intensiv)はこのB1語彙リストに含まれていた。B1リストにも載っていない、実質的な難語の数が22語(共通テスト(1)は9語)で、地名やeinschätzen, heranrückenなど基礎動詞から意味が想像できる可能性があるものも含まれているが、やや多い印象である。なお、この22語中、実に20語が第7問に集中していることは特筆に値する。第7問は、文化圏によって人と人との物理的距離感が違うことを扱った、異文化理解に関する社会心理学的要素を含んだ学術的なテキストである。外国語を学習する上でも重要な分野であるという、出題者の明確な意図は高く評価したい。しかし、テキストには多くの難語が含まれ、入試問題として適切な難度であったかという点には疑問が残る。内容には地理的・文化的な要素も含まれており、受験者が持つ既存の知識がテキスト理解の一助となり得る。その一方で、明らかにB1レベル以上と考えられる動詞とintim, Geländer, Desinteresseといった難語が散見され、本文と選択肢を十分に理解しないまま解答することが懸念される。このようなテキストでは、難語を基本語彙に置き換える、イラストや図などの視覚情報で理解を助けるといった工夫によって難度を調節することを提案したい。

以下、大問ごとの評価を記す。

第1問 設問数(7)、頁数(2)、配点(21)は共通テスト(1)と同様であり、難度も同等である。

発音に関する小問3題、文法に関する小問3題、意味に基づき名詞を分類する小問1題から構成されている。重要な基本事項の理解度を確認できる問題である。

問1 子音bを含む名詞におけるbの発音が、有声かを問う問題である。無声子音の前に置かれたbは無声音となるため、Obstを採用したのは妥当な判断と思われる。

問2 母音aの長短を問う問題であり、個別の発音知識があれば答えられる。

問3 複合語、動詞から派生した名詞、外来語由来の語などでアクセントの位置が異なることを問う良問である。

問4 主語が3人称単数の場合に、現在人称変化の幹母音がaに変わる不規則動詞に関する知識を問う基本的な問題であり、難度は妥当である。

問6 名詞を複数形にしたときに、母音が変音する名詞を問う問題である。選択肢全てで、複数形の作り方が異なるという知識を必要とする良問である。

問7 グループに分類された名詞に対し、選択肢の中からそれらに属さない名詞を選ぶ、工夫された良問である。この中でSpinatやKarotteは比較的難度が高いが、グループ分けが助けとなり解答しやすい。基礎語彙に忠実な語彙選択である。

第2問 設問数(8)、配点(24)、出題形式のいずれも共通テスト(1)と同様で、基本的な文法・語彙・表現の知識を問う内容である。項目には幅広い文法項目が盛り込まれ、ドイツ語の基礎的な能力を重視した設問になっている。

問2 erfüllenと結びつく、適切な格変化をさせた人称代名詞を選択させる問題である。文意を理解できなくても正解できる問題になっている。

問3 文意を理解した上で、適切な不定関係代名詞を選ぶ良問である。

問5 sich verwirklichenが不定形で用いられるような助動詞を選ぶ必要がある。

問6 動詞gelingenがsein支配であるという知識も含め、その用法を理解しているかを問うている。比較的難度の高い問題と言える。

問7 *jn. um et. bitten*の表現理解を問う問題である。難度は妥当である。

問8 möglichst+形容詞の原級という表現の知識を問う良問である。

第3問 出題形式、設問数(5)、配点(25)は共通テスト(1)と同様である。2語以上から成る選択肢の数、テーマ、場面の選択についても、共通テスト(1)とそろえられている。

問1 *an et. teilnehmen*と、*um ... zu*不定詞の表現の理解を問う良問である。

- 問2 主文が現在完了形であることと、daを用いた副文の語順を問う良問である。
- 問3 mit *et. / jm. zu tun haben*の表現が分かった上で適切な関係代名詞を選ぶ必要があり、難度は高いが、重要な表現を問うている。
- 問5 日常的なコミュニケーションのための基本的で重要な表現を問う良問である。
- 第4問 設問数(8)、配点(40)、問題形式、状況把握力を測る設問である点は共通テスト(1)と同様である。会話の場面数は1つ少なく、2つの連続する場面から構成されるテキストになっており、各4題の小問が設けられている。トピックはKenとMakiがフランクフルト在住の友人Danielとテレビ電話でドイツ旅行を計画し、実際にドイツを訪れ、列車運休に対応して複数都市を巡るといった身近な内容である。都市名入りの地図や、会話に登場する名所の写真といった、共通テスト(1)にはなかった視覚資料も挿入されている。状況を総合的かつ的確に捉える必要のある良い構成と設問であるが、共通テスト(1)よりも読み取るべき情報量は多く、多少難度の高い内容であったと言える。ただし、共通テスト(1)・共通テスト(2)の両方で用いられた総語数はいずれも約440語で、差はなかった。
- 問2 *schade um et.*の意味を問う設問である。前後の文脈から意味を捉えることも可能ではあるが、比較的難しい問題である。
- 問3 スマートフォン画面の時刻表の情報を総合的に理解し、適切な選択肢を選ぶ良問である。*alle, pro*の意味理解が鍵となる。テキストの時刻表示ではピリオドを使用しているが、ここではコロンになっており、統一することが望ましいのではないかと。
- 問4 下線文以前のやりとりだけでは正解は分からず、下線文後の流れを詳細に理解する必要があるため、難度の高い問題である。
- 問5 駅構内のアナウンス内容の理解を確認する良問である。ドイツ国内で日常的に生じる事象を扱った点は評価したい。
- 問6 適切な選択肢を選ぶためには、1つめの場面で提示されたKenの要望の理解も求められる良問である。ただし、情報を確認するためにやや時間を要する。
- 問7 各選択肢を理解していれば正解できる可能性がある。空欄後のDanielの説明の理解を問うには、*Tut mir leid.*などの選択肢を含める方がより効果的であった。
- 問8 吹き出し部分の構内アナウンス情報や、問3で提示された時刻表も手がかりにすることで適切な選択肢に導く良問であるが、難度は高い。
- 第5問 配点(30)は共通テスト(1)と同じである。小問の数は1問少ない5問だが、問5はテキストの内容に合う記述を2つ選ぶことになっているため、求められる解答の数は同じである。テキストは、SilkeとYvonneが仕事を終えて話している最中に、Yvonneと一緒に映画館に行くために待ち合わせていたDirkからメールを受け取るという設定である。日常会話テキストの中に、別のテキストが入った構成は、共通テスト(1)と同様で、語数もほぼ同等である。会話は、日本文化に興味を持つDirkについて展開し、Zen, Kloster, buddhistischといった、文化にまつわるやや特殊な語彙も含まれているが、日本の学習者には親しみを覚えやすい内容である。設問は、様々な慣用表現に関する知識と会話の流れを正確に把握する能力を試すものになっている。
- 問1 テキスト前半部分の会話の流れを理解した上で、相手にものを見せる時に使う慣用表現を選ばせる良問である。
- 問3 Dirkからのメッセージにある *ich schaffe es heute doch nicht ins Kino*の意味を問うている。メッセージ全体の大意をつかみ、Dirkに別の用事が入った、つまり映画に行く時間がないことを理解する必要がある良問である。なお、*Ich muss jetzt ganz dringend ein paar Dinge erledigen.*の文に *dafür* を入れるなど、招待が来たことと、今日映画館に行けないことにつ



ながりをより明確にすることを提案したい。

問4 Yvonneが発した、Das würde mir nicht im Traum einfallen! という発言の意味を問う問題である。前後の会話の流れから正解を導き出すこともできる。

問5 6つの選択肢から、テキストの内容に合うものを2つ選ぶ問題である。詳細すぎる内容ではなく、ストーリー全体に関わる点を問う設問になっており、良問である。

第6問 配点(25)は共通テスト(1)と同じである。小問の数は1問少ない3問であるが、問3がテキストの内容に合う記述を2つ選ぶ問題になっているため、求められる解答数も同じである。テキスト理解に重点を置いた設問が中心である点も、共通テスト(1)と共通している。それに対して、大きく異なるのがテキストの種類である。共通テスト(1)の第6問は童話であったのに対し、共通テスト(2)は日本の高校に通う交換留学生のブログである。日本での日常の出来事が留学生の視点で描写されているテキストで、問5と同じく、日本の学習者にはなじみやすい内容であり、好感が持てる。同一の試験に第5問、第6問と日本がテーマに入ったテキストが連続するため、テーマ選択のバランスという点ではやや疑問が残る。

問1 ブログテキストを読み、内容に関する6つの文を時系列に並び替える問題である。ストーリーの流れを問う問題で、問2以下を解く際にも間接的に助けになる良問である。⑥のYuris Nachricht übersetzt は、テキスト本文の Auf Deutsch lautet sie etwa so: に対応していることに気付けるかという点が、この問題の難度をやや上げている。

問2 ブログ中に紹介されている、クラスメイトのYuriのメッセージに対して、適切な返信を選ぶ問題である。正解である③の文にあるAnfeuernが難語であるが、ブログテキスト全体を理解できていれば、正解できる。

問3 6つの日本語の文から、テキストの内容に合うもの2つを選ぶ問題であるが、同形式の第5問の問5より、テキスト細部の理解を重視した問題になっている。

第7問 頁数(4)、配点(35)であり、設問数は7問で、本文32行、総語数335語の「対人関係における相手との距離感」というテーマを扱った科学的な読み物である。設問ごとに4つのドイツ語文の選択肢の中から、関連する段落の内容を照合し、該当するかどうかを見極める高度な読解力を必要とするため、共通テスト(1)の第7問より難度は高く感じられる。本文では、最初に4つの距離感を、図を用いて具体的に説明している。その後「接触・非接触文化」という観点から、距離感が文化圏によって異なること述べ、その違いを知ることが、異文化理解にとって重要であると言及している。科学的・学術的要素を含むテキストであり、語彙・表現の難度は高い。

問1 顧客と店員の距離感を問う問題である。第2段落の内容とServicepersonalの意味を正確につかめれば、正答を選ぶことができるだろう。難度は適切である。

問2 選択肢と本文内容の整合性を問う問題である。「心地よいと思う距離感が、文化圏によって異なるであろう」と言及された第3段落の該当箇所が分かれば、正解できる。

問3 第3段落の記述内容を的確に理解し、選択肢の内容を接触文化か非接触文化で整理し、判断する必要がある。ただしそれを短時間で行なうことは難しい。

問4 非接触文化圏に属する国名を選ぶことが求められる。出題の意図は理解できるが、地理の知識のみによらないようにする工夫が必要と見られる。

問5 やや長めのドイツ語文での選択肢と本文内容との整合性を問う問題である。選択肢に含まれるGeländer, arrogantは難語であり、高度な語彙力を必要とする。

問6 設問及び選択肢にstressfrei, Gestik, Mimik, angemessenといった難度のやや高い語彙が見られるため、選択肢の内容を理解することが難しい可能性がある。

問7 第4段落の内容をイラストで表した選択肢の中から、答えを1つ選ばせるという工夫が見られる。本文の内容理解を端的に確認できる出題形式を評価したい。

### 3 ま と め

今年度の共通テスト(2)の「ドイツ語」は、共通テスト(1)と同様、第4問以降が過去の出題の傾向と大きく変わっており、総語数、総語彙数が多かったことが特徴的である。全体的にドイツ語圏のランデスクンデや国際交流など、若い学習者が追体験できる親しみやすいテキストが多く、第7問も、難語が多いながらも、異文化理解という外国語学習に重要なテーマを扱っている。私たちがアクセスできる情報源は日本語や英語だけでない。それに加えてドイツ語でも情報を得るスキルを身につけることができれば、より多角的な視野を獲得できる。その習熟度を測る客観的な試験として、共通テストでの「ドイツ語」の存続が強く希望される場所である。

### 第3 問題作成部会の見解

#### 1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 英語以外の外国語については、大学入試センター試験の枠組みを受け継いだ『筆記』テストを課し、「リスニング」テストは実施しない。
- 教科としての外国語科の目標である「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」に基づき問題作成を行う。  
また、実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定を重視する。
- 問題作成に当たっては、CEFR 等を踏まえた力を問うことをねらいとして作成する。  
その際、大学教育の基礎力を踏まえ、また、高等学校において英語以外の外国語を初めて履修する者もいることを考慮し、問題作成を行う。

#### 2 各問題の出題意図と解答結果及び出題に対する反響・意見等についての見解

今年度の問題においては問題構成を従来から大きく変えている。昨年度までは会話が第4問～第6問の大問3問、読解が第7問であったが、今年度は共通テスト(2)においても、会話文問題を大問2問にまとめ、読解についても大問を2問設けた。会話文を素材とした第4問、第5問では会話全体の流れ、発話の意図、要点の正確な把握などを多角的に問うことを目指し、読解では第6問、第7問で大意把握や精読など、文章の種類に応じた多様な読みの能力を測ることを意図した。このほかにも問題形式を変更した部分がある。配点は、会話文問題全体で70点、読解問題で計60点と、昨年度までの配点を踏襲している。詳細については各問題の報告を参照されたい。

多様な能力を測ることを意図し、また実際のコミュニケーションを想定した問題を増やしたこともあり、共通テスト(1)と同じく、全体として語数が増加した。この点については日本独文学会ドイツ語教育部会（以下「ドイツ語教育部会」という。）から指摘があった。さらに、高等学校教科担当教員（以下「教科担当教員」という。）からも、受験者にとって負担増になったという指摘を頂いた。

使用語彙に関しては、例年同様に、高等学校3年間で学ぶ範囲を中心とし、それを超えると考えられるものには注や平易な言い換えなどを利用し、受験者への過度の負担をできる限り回避するよう配慮した。熟語表現や文法項目についても、高等学校3年間の学習を踏まえて理解できるものを中心とするよう留意した。しかしながらこの点について、共通テスト(1)と同様に、教科担当教員からは、口語表現の理解を踏まえた問題が複数含まれており、受験者の学習環境によっては難度が高かったであろうという指摘を頂いた。また、ドイツ語教育部会からは、難度の高い語の理解を問う設問が複数含まれていたことを指摘された。

なお、平均点等の情報については、共通テスト(2)は受験者が少ない（4名）ため、公表していない。それゆえ、共通テスト(1)の試験との難度の違いや過年度の問題との比較は単純にできないが、問題作成に際しては、問題構成・出題数のみならず、難易度についても共通テスト(1)と同程度であるように努めた。

設問構成と出題形式については、「思考力、判断力、表現力等」を含め、ドイツ語を用いたコミュニケーションで問われる多様な能力を測るという目的に沿って検討を重ねて決定している。問題の質については、ドイツ語教育部会からも「全体的にドイツ語圏のランデスクンデや国際交流など、若い学習者が追体験できる親しみやすいテキストが多く、第7問も、難語が多いながらも、異文化理解という外国語学習に重要なテーマを扱っている」という評価を頂いた。今後はレベルの適正化

を図りたい。

問題構成は、従来の大問7題の形式を踏襲しているが、以上で述べたとおり構成を大きく変更した部分がある。分野別の設問数及び配点は次のとおりである。

発音・文法	第1問～第3問	20問	70点
会話・コミュニケーション	第4問～第5問	13問	70点
読解	第6問～第7問	10問	60点

第1問 第1問は主として単語レベルでの基礎的な発音、文法、語彙の知識を問う問題である。問1～問3は発音に関する問題である。問3は、昨年度同様、選択肢をペアにし、アクセントの位置が比較的単純なドイツ語の特性を踏まえて、問題作成上の工夫を行った。問4、問5は語形変化の問題である。問6は名詞の複数形を問う問題とした。問7は、日常的に使用頻度の高い名詞の意味に関する知識を問う問題である。教科担当教員からはおおむね基本的な知見を問うものとして評価をされた。日本独文学会ドイツ語教育部会からは、語彙レベルではやや難度が高いと指摘された箇所もあったが、「重要な基本事項の理解度を確認できる問題である」との評価を得ている。

第2問 第2問は実際にドイツ語を運用する日常的な場面において、文の理解を前提にして個々の文法知識及び使用頻度の高い重要な語彙の知識を問う問題である。文法の知識を正確に運用できるかどうかを識別するため、基本的なものからやや難度が高いものまでを出題し、難易度のバランスを工夫した。教科担当教員からはおおむね基本的な知見を問うものとして評価をされた。ドイツ語教育部会からも全般に良問であるという評価を受けた。

第3問 第3問は与えられた語を適切に配置させることで、様々な文法知識や熟語表現を多層的に問う問題である。昨年度までは、選択肢全ての語句を用いて文を完成させる形式だったが、今年度は、6つの選択肢のうち5つのみを用いる形を採用し、語彙選択の力も焦点化して問うものにした。大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）の趣旨に鑑み、ドイツ語運用能力を総合的に問うのが目的である。各問題のテーマは、日常的な話題から選び、基本的な語彙を用いた自然で日常的なドイツ語表現になるように配慮した。教科担当教員からは、今回の問題形式の変更により難度が上がったことが指摘されたが、ドイツ語教育部会からは当該形式やテーマに関して工夫を評価され、良問とのコメントも得ている。

第4問 第4問は、共通テスト(1)と同じく、大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の第4問と第5問を統合する形で作成された。

センター試験第4問の問1、問2は比較的短い対話で構成され、日常会話での決まり文句、数的表現を問う問題としていた。問3は日常場面で目にするテキストと基本的語彙の把握、問4では対話の自然な流れに沿って文脈を理解する能力を問うていた。またセンター試験の第5問はやや長い対話を問題文とし、問1は会話の慣用表現、問2は会話の内容の理解、問3は会話から話者の心情を読み取る問い、問4は会話全体の内容把握を問う問題としていた。第4問、第5問ともに問題数は4問、配点20点であった。

共通テスト(2)の第4問は、上記センター試験第4問・第5問を合わせて問題数8問、配点40点とした。対話文は、日本人兄妹とドイツ人の友人の、旅行前と旅行中の2つの場面で交わされる、一連の会話とした。問1は発言の意図を問う問題、問2は日常会話の言い換え、問3は時刻表を基にした数的表現についての問い、問4は文脈を理解し発言の基にある真意を推測する新問題とした。問5は日常会話で耳にするアナウンスの内容を文脈から読み取る問い、問6は対話全体の内容把握を問う問題、問7は日常会話の定型表現、問8は対話の正確な情報把握

問う問題とした。

細切れの設問ではなく、一連の対話とすることにより、「日常生活の中から課題を発見し解決方法を構想する」場面設定を行った。昨年度のセンター試験（本試験）での得点率が第4問、第5問ともに8割台前半だったので、識別力を上げるよう調整した。ドイツ語教育部会からは「状況を総合的かつ的確に捉える必要のある良い構成と設問であるが、共通テスト(1)よりも読み取るべき情報量は多く、多少難度の高い内容であったと言える」とのコメントを頂いた。今後ともドイツ語教育部会や高校からの評価を真摯に捉え、よりよい問題とするよう努力していきたい。

第5問 共通テスト(1)と同じく、テキストを挟む一連の会話を本文としたセンター試験の第6問を、同形式で共通テストの第5問とした。設問数6、配点30点ともに変更はない。Eメールを挟んだ、友人間の一連の会話であるが、「文化にまつわるやや特殊な語彙も含まれているが、日本の学習者には親しみを覚えやすい内容である」（ドイツ語教育部会）との評価を頂いた。

問1はト書きに読み取れる状況に合った発言を選ぶ問題である。問2は会話文の言い換え、問3は内容把握を踏まえた適切な語彙の選択、問4は語句の言い換えである。問5は、テキスト及び会話文全体の内容把握を問う問題とした。教科担当教員からは「2人の登場人物のうちの1人の恋愛事情に関する話となっており理解しやすいことに加え、身近なテーマであり場面を想像しやすいが、展開が急な印象」との評価と御批判を頂いた。今後とも、高校でのドイツ語教育をきちんと身に付けた受験者がその成果を発揮できる設問となるよう努力したい。

第6問 読解問題では全体理解力（Globalverständnis）と細部理解力（Detailverständnis）の両方を測ることに重点を置いた。昨年度までのセンター試験では長文問題は第7問だけであったが、今年度からの共通テストでは第6問と第7問の2問の読解問題を出題することにした。問題数が増えたため、それぞれの問題のテキストの長さは昨年度までより短くなっている。2つの形式の異なる問題を設けることで、多角的に受験者のドイツ語力を測ることをねらった。

第6問の主眼は全体理解力に置かれる。問題文はやや短めのものとし、設問文には日本語のみを用いた。受験者にとって身近な話題を記した日記（ブログ）テキストを問題文とした。テキストの内容を的確に理解し、それに基づいて全体のストーリーの自然な流れをつかむ能力を測ることができたと考えている。

教科担当教員からは、高校生活が題材であり、現在完了形が中心の文なので、受験者にとって取り組みやすい問題であるという評価を受けた。ドイツ語教育部会からも「日本の学習者にはなじみやすい内容であり、好感が持てる。」と評価された。各設問についても適切な難易度であったと評価されている。

第7問 第7問の主眼は細部理解力に置かれる。問題文はやや長めのものとし、設問文にはドイツ語を多く用いた。異文化コミュニケーションの際に問題となるパーソナルスペースについてのテキストを問題文とした。現実に起こりうる問題について取り上げた論述文であり、第6問とはドイツ語能力の違った側面を測ることをねらった。

テキストの細部に記された部分的内容を正確に読み取り、それを組み合わせることで筆者の見解を的確に理解する能力、そして一つの内容をドイツ語の複数の言い方で表現できる能力を測ることができたと考えている。

教科担当教員からは、図の挿入と4種類のパーソナルスペースが太字で強調されていることが理解を助けるものとして評価された。ドイツ語教育部会からは第7問には難語が多いという指摘があったが、教科担当教員からは、難易度を上げないために独問独答の語彙数が抑えられているという評価を頂いている。

問4については教科担当教員、ドイツ語教育部会の両方から地理の知識が必要という御指摘を頂いたが、ごく基本的な知識があれば正解できるので、たとえ高校で地理を選択していない受験者でも選択肢に挙げられた国がどこにあるか分からなくて正解できないということはないと考えている。

### 3 ま と め

現行の高等学校学習指導要領においては、英語以外の外国語に関する科目は「英語に関する各科目の目標及び内容等に準じて行うもの」とされ、当該諸言語に応じた明確な指導目標が存在しないなか、事実上共通テストが高等学校の学習目標となっている点に鑑み、問題作成分科会としてはドイツ語学習者の裾野を広げるためにも、問題内容と形式、レベルとバランスに配慮しつつ、さらに良問の作成に向けて努力を続けていく所存である。